山形県大石田町における歴史的町並みを保全した町づくりに関する研究

A Study on the Conservation of the Historical District at Ohishida Town in Yamagata Prefecture

温井 亨*

Tohru NUKUI

摘要：本研究の目的は、山形県北村山郡大石田町の中心市街を事例として取り上げ、歴史的町並みを残しつつも、既に建て替えも進んでいる町並みでの町づくりの方法を探ることである。そのために現存する町家を実測調査し、敷地と建築がセットになった単位を敷地建築類型と名付け類型化し分析した。その結果、歴史的な敷地建築類型に共通するのは、建物を北西側に寄せ、南東側に庭を設けて通風・採光をとるという住環境維持の仕組みであり、今後の町づくりにも適用可能なことを示した。また、街路景観の保全についても、街路に面する庭という類型の特徴を活かした整備が、町家のファサード修復とともに有効であることを示した。

1. はじめに

本研究の目的は、山形県北村山郡大石田町の中心市街を事例として取り上げ、歴史的町並みを残しつつも、既に建て替えも進んでいる町並みでの町づくりの方法を探ることである。大石田町の歴史的市街は最上川の河岸として発展し、短冊型の敷地と町家による町並みを特徴とするが、既に建て替えられた建物も多い。しかしながら近年、人口減少、商店街としての活力低下に対して、歴史的町並みの保全を軸とした町づくりを模索し始めている。1960年代以降の建て替えや増改築が、ファサードを陸屋根に見せるような洋風近代化を指向したのに対して、現在ではロードサイドの郊外型大型店に対抗するために、郊外型大型店にない魅力として、自らの歴史と文化に目を向けつつある。

平成5（1993）年に大石田町商工会と大石田町本町商店振興会がまとめた商店街活性化計画「最上川舟運文化発祥の商店街づくり」¹⁾は、歴史を活かした町づくりの最初の提案である。平成9（1997）年に日本建築学会が文化庁の委託を受けて行った「歴史と文化のまちづくりへ」²⁾と題する報告では、大石田町中心部の歴史的町並みが事例調査地の1つに選ばれ、登録文化財制度の活用等による歴史を活かした町づくりが提案された。大石田町は翌年、それを受けて街並保存検討委員会を組織し、現存する歴史的建築の実測調査等を行い「大石田町街並保存検討報告書」³⁾を作成している。

筆者は日本建築学会の調査と、翌年の大石田町の調査に参加しているが、本研究は両調査のデータを使い、建築と敷地の類型化により、主として住環境という視点から町並みを分析し、歴史的市街の町づくりの方法を探る。住環境という視点を取るの、大石田町のような既に建て替えの進んだ市街では、文化財の保存と

いう論理ではカバーしきれない問題も多く、また住民の合意形成を図るための論理としても不十分と考えるからである。そこで、歴史的市街保全が住環境の上からも優れていることを示し、それによって町並み保全の合意形成を図れたらと考えるのである。歴史的市街が住環境を保つ仕掛け

を持っていることは、関西の町家等では論じられているが、東北に於いてはこれまでほとんど論じられていない。

なお、保全型の町づくりに先行する調査研究として、建築史の立場から、高橋恒夫氏による河岸場集落と職人集団としての大石田の歴史的分析⁴⁾がある。

2. 歴史的町並みの概要

次に大石田町中心部の歴史的町並みの概要を説明する。

大石田町の歴史的町並みは、図1のように最上川の河岸として形成された港町であり、一時的な衰退時期はあるものの、17世紀初めから明治まで、最上川舟運の内陸最大の拠点であった。図2に、本研究で扱う歴史的町並みの範囲を示すが、ここでは17世紀初めに町割りが行われ、川と平行する大通りの両側に町家が並ぶ市街が形成された。住民構成の特徴を記せば、かつての旦那衆の大きな店は中央部に多く、四日町と呼ばれる北西部や、川端町と呼ばれ大通りに面しない南東部には、大工や左官等の建築職人が多い。建築職人が多いのは、町家の並ぶ高密度居住に由来する火災や、最上川の洪水による家屋の損壊の頻発に由来し、江戸時代以来のものである。

大石田の舟運は明治34（1901）年に奥羽線を通じると衰退したが、荷問屋等の有力な商人はこの時期に地主化し、かえってこれ以降昭和初期に、周囲の敷地を併合した間口の大きな屋敷がつくられた。戦後は地主層が解体し、また後継者の町外への転出、郊外型大型店の進出により、商店街としての衰退が問題となっている。中心部の町並みが歴史的面影を良く残しているのは、舟運衰退後の交通機関である鉄道（奥羽線）も幹線道路（国道13号）も旧市街をはずれたからである。

気候、災害上の特徴として町並み保全に関係するのは、しばしば積雪2mを越える豪雪であり、また、かつては洪水、火災が頻発した。最後の大水害は特殊堤建設前の昭和44（1969）年、最後の大火は明治37（1904）年であり、現在残る建物は一部の土蔵を除き明治以降の建築である⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

都市計画的には建蔽率80%、容積率200%であり、近隣商業地域に指定されているが、防火系の地区指定はされていない。現状の法定都市計画は、現在同市街が必要としている課題に応えるには不十分である。なお、中心市街を縦断する本町通りの拡幅が都市計画決定されていたが、平成10（1998）年に街並保存検討委

図-1 山形県と大石田の位置

*東北芸術工科大学デザイン工学部環境デザイン学科

図-2 歴史的町並みの概要

員会が拡幅撤回を答申し、現在は町も現状幅員での整備を考えている。

本研究で考察の対象とするのは、平成9（1997）年9月に行われた街並保存検討調査に於ける歴史的建築とその敷地の実測調査の結果であり、図上に①～⑰で示す。これらの選定基準は、歴史的市街（図に示した調査エリア）内の全117戸を対象に行ったアンケート調査（同年8月に実施）等から、歴史的建築であること、敷地が連続していること、種類の違い、地区による違いなどを勘案して決定した。具体的に選定の手順を述べれば、まず、歴史的建築が連続している場所として、川側に⑩～⑰が並ぶ所、川と逆側に③～⑤が並ぶ所を見出し、計10棟の実測を行った。この中には歴史的建築でないものもあるが、研究目的が住環境にあるので比較のために調査した。また、連続はしていないが歴史的建築として、②と⑰の2棟を調査した。一方、屋敷型の類型として①を、地区としての性格の違いを見るために北西部から⑥～⑨を選んだ。ただし同地区に残る歴史的建築は少なく、建物の全体が残っているのは⑨だけである。また、図上⑩で示す建物は歴史的建築であるが、すでに高橋恒夫氏によって実測が行われ実測図が報告⁴⁾されているので、今回は改めて実測は行わず同資料を考察に用いた。

図より明らかなように大石田町中心部の歴史的市街には土蔵が数多く現存する。地区の複数の高齢者からのヒアリングによれば、戦後の時点では現在の倍の土蔵があったと言う。一方、土蔵以外の部分は建て替えが進み、現在建物全体が残っている町家は少な

い。前述の高齢者からのヒアリングによれば、かつては中心部の歴史的市街の全ての家屋は町家であり、「ろうず」⁸⁾と呼ばれるトオリニワを持っていた。図に現在でもろうずを維持している家屋を記す。実測対象を選ぶ際の歴史的建築の基準は、ろうずの有無を重視している。

3. 歴史的敷地建築類型

実測調査の結果から類型化を行うが、その際、敷地と建築がセットになった単位を考え、それを敷地建築類型と名付ける。類型化する要素は、敷地とその上の建築、庭、塀であり、その配置、1階平面図を類型化して平面の類型とし、立面を類型化して立面の類型とする。図3に、実測調査から抽出した大

石田町中心部の歴史的な敷地建築類型を掲げる。この7類型で大石田町中心部の歴史的な敷地建築類型は尽くされていると考えられるが、例外は屋敷型である。これは昭和初期に周囲の敷地を併合して成立した類型であるが、本研究では分析の対象に加えなかった。その理由は、調査できた屋敷型の改変が大きく十分な分析が行えないこと、住環境維持の仕組みという点では、敷地に余裕のある屋敷型の環境が良いのは自明であることによる。さて、図に掲げた歴史的な敷地建築類型の特徴は以下の通りである。

まず、平入りの店蔵を持つ類型をA型としてまとめる。A12型は、店蔵の脇に黒板塀がつく類型である。立面に見えている樹木は、しばしば通りに被さっていたことが現存する事例、ヒアリング、古写真⁹⁾から分かる。店蔵の2階は荷蔵の場合と蔵座敷の場合がある。ろうずは雁行し、奥の諸室は2列型となる。大石田町中心部の歴史的建築では、通りに面する建物がヨコ屋（棟が通りと平行）であれタテ屋（棟が通りに直交）であれ、奥につづく部分は常にタテ屋となる。ろうずに面する奥の諸室は、店蔵側から、ナカマ、チャノマ、ダイドコロと呼ばれることが多い。

A22型はA12型に似るが、店蔵脇の黒板塀がない。その分だけ間口が狭い。

B型は、妻入りの店蔵が通りに面する類型である。店蔵は2階建てであり、2階は荷蔵である場合と、蔵座敷の場合がある。1階はもともと2室に分かれ、通り側がミセ¹⁰⁾、奥がブツマと呼ばれる場合が多い。ミセの手前、下屋庇の部分はコマヤと呼ばれる。もともとは座売りであり、ミセは座敷であったが、現在は蔵全体

を土間化している店も多い。逆にミセを座敷のままにしている家は商売を止めて住宅化している家である。奥の諸室はろうずに沿ってナカマ、チャノマ、ダイドコロと3室の場合と、チャノマ、ダイドコロと2室の場合がある。後者の場合は、蔵のブツマがナカマの役割を果たしていると考えられる。

B12型は、妻入りの蔵の脇にヨコ屋の店が付加されたタイプである。現存する1軒は奥の諸室2列型である。この類型は通りに面して付加されたヨコ屋の分、間口が広く庭を持つ。

B22型は、妻入りの店蔵の脇にも

図-3 歴史的な敷地建築類型

ともと黒板塀が付いていた類型だが、現存する事例に塀はなく全て車庫となっている。所有者からの聞き取りにより、かつては黒板塀越しに樹木が通りに被さっていた場合のあることが分かる。調査した住宅の奥の諸室は2列型（梁間4.5間）が多かったが、1軒では1列型と2列型の混合（梁間4間）であった。

C型は通りに面した蔵を持たない類型であり、全て建築全体が通りに対してタテ屋、妻入りとなっている。このうちC11型は、妻入りの主要部分に、通り側だけヨコ屋が付加された形である。現存する1棟は職人の住まいであり、ヨコ屋部分も含めて通り側全体が仕事場になっている。奥の諸室は1列型であり、通り側からナカマ、チャノマと呼ばれている。ヨコ屋のある分が庭となる。

C21型は脇に黒板塀がつく類型である。かつては塀の脇まで庭で、そこに樹木があったと考えられるが、現存の1棟は車庫になっている。奥の諸室は1列型である。

C31型は敷地間口いっぱいに建っている類型である。現存する1棟は間口3間1列型で、総2階建てに改築され居室を2階に設けている。

4. 住環境維持の仕組み

図4に掲げる⑩～⑬の連続平面図を用いて、大石田町中心部の歴史的市街に於いて住環境がどのように確保されてきたのか、店のゾーン、居室のゾーン、畑・庭のゾーンの3つに分けて考察する。図は網掛けで示す増築部分を含むが、ここで分析するのは増築部分を含まない当初の平面である。

まず店のゾーンであるが、ここは住環境より生業が優先されると推測される。したがって通常町家の場合、間口いっぱいに使うのが一般的だが、No.2、No.6、No.9の場合、黒板塀がまわり庭の樹木が見えたことが分かる（No.9はマツが現存、他はヒアリングで確認）。ただし店との間は壁であり、店が通りだけに開かれるのは一般の場合と変わらない。また、No.2の妻入りの店蔵にはかつてブツマがあり、蔵特有の閉鎖的な部屋となっている。しかし、図にはないが同様なつくりでも、②④（図2）ではロウズ側に扉を設けた開放的な座敷となっていて、蔵のブツマの中間的な性格が伺える。

次に住環境と最も関係する居室ゾーンについて考える。図では現存する5棟の町家とも南東側にろうずを持ち（No.4は畳に改築）、建物を北西側に寄せ、ろうずの前に庭（空地）をつくる（No.2は例外）というほぼ共通した配置を備えている。これは通りから奥へ向かって4～5室が並ぶ大石田の町家にとって、中ほどのナカマ、チャノマへの通風・採光は、どうしても側面から入れざるを得なくなるからであり、住環境確保の必要から守られてきた歴史的な約束事だと考えられる。ただし類型によって違いがあり、黒板塀のまわる類型であるA12型（No.9）、C21型（No.6）が最も通風・採光条件が良く、次いでヨコ屋がつくB12型（No.8）が続き、A22型（No.4）はろうずの雁行分でかろうじて空地を確保していることが図から読みとれる。

最後に畑・庭のゾーンであるが、ここは基本的に緑の多い空間となっていて、歴史的市街の住環境に寄与している。付属屋や、また離れと見なされる蔵座敷などもあるが、その場合もNo.9のように、主屋とは逆の隣地境界線に寄せて建てるなどして、主屋居室への通風・採光を確保する場合が多い。

5. 増改築と今後の展開

戦後になると増改築や建て替えにより歴史的な敷地建築類型が崩れ、町並みが変化する。そこで、図4に増築部分を網掛けで示し、増築・建て替えによる市街の変化を以下のようにパターン化して分析する。調査エリアに見られる増築パターンは図中にほとんど見出される。

まず、第1のパターンは、通り側の黒板塀が廻っていたところに増築するパターンである。図で、No.2、No.6、No.8はここに車庫を増築している。この中には、車庫の2階に居室の増築も併せて行った例もある。また、No.9は昭和2年に洋館を増築している。現存する1本のマツは塀越しの庭の名残と見られる。

第2のパターンは2階の増築である。歴史的な町家のつくりは蔵以外が平家だが、それを2階建てとするものである。No.4がそれに当たり、店蔵の奥の諸室を総2階化している。No.4では隣が空地であるので問題ないが、このパターンは隣家の採光への影響が危惧される。

第3のパターンは裏への増築である。図ではNo.2が、菓子工場と居室を裏に増築している。しかしながら、No.6のように裏にすぐ続いて蔵がある場合には、このような増築パターンが行えない。そこで第4のパターンとして、裏側側方への増築がある。No.6は、このパターンの増築である。

一方、建て替えの場合は3パターンある。一つはNo.3に見られる歴史的な敷地建築類型に倣った建て替えである。二つ目のパターンはNo.5、No.7に見られる総2階化、三つ目はNo.1に見られる庭付き一戸建て型である。

次に、歴史的な市街が持っていた住環境維持の仕組みと、ここで述べたその変化の分析を踏まえて、今後の町づくりへの展開を考える。歴史的な敷地建築類型は、主屋を北西側に寄せ、南東側にロウズと庭を設けて通風・採光を図るという優れた住環境維持の仕組みを持っていた。戦後、増築が行われるが、前述の3パターンとも居室ゾーンには手を付けず、歴史的な仕組みを活かしている。この考え方は今後の町づくりに於いても引き継いでいくべきと考える。ただし、3パターンを吟味すると、もともと利用度の低い畑・庭ゾーンへの増築は妥当と考えられるが、2階への増築は隣家への影響に注意を要する。また、店ゾーンでの増築は住環境上は影響が少ないが、街路景観として問題があり、これは別に論じる。建て替えについても同様で、歴史的な敷地建築類型に倣った建て替えは住環境上問題ないが、2階建て以上にする場合増築と同様隣家への問題がある。また、庭付き一戸建て型は本来郊外住宅地の敷地建築類型であり、商店街・中心市街としての賑わ

図-4 歴史的町並みにおける住環境維持の仕組み

図－5 街路景観の保全

いを奪うことに繋がる。

図5は、図4に掲げた市街の通り側連続立面図である。これを使って店ゾーンでの増築と街路景観の問題を考える。まず、現状図を見ると、歴史的な5棟がバラバラで、連続した町並みが感じられない。それは5棟の間に建て替えられた店舗が割り込んでいるためでもあるが、もう1つの理由は、5棟自らが車庫等を増築して自らの姿を目立たなくしているためである。そこで今後の町づくりとしては、歴史的なファサードの特徴がはっきりわかるような修復が望まれる。保全整備案は、部分的改築や増築部分の除去によって、どこまで修景可能かを検討している。まずNo.2とNo.3の車庫を、シャッターから壁無しの開放型に変更する。これはNo.6の住宅が既に行っている車庫のつくりで、壁を設けず柱だけで屋根を支持する方法であり、奥の庭の緑が通りからも同われ、住環境からも庭へ風が抜け好ましい。No.4の平入りの店蔵では、屋根を背後への片流れから切妻に戻す。No.8の妻入りの店蔵では、車庫を開放型に直すことと、脇の2階建ての増築部を取り除けば、当初のB12型に戻すことができる。No.9でも、脇に増築した洋館部分を取り除くことにより、店蔵を際立たせることができる。

こうして、大石田の歴史的町並みの特徴であったファサードの多様さ（5棟の歴史的立面の類型が全て違う）、通りから見える緑の多さ（歴史的類型A12型、B22型、C21型の特徴）を、車庫などの現代生活に必要なものは残しながら、再び取り戻すことができる。

6. まとめ

大石田町中心部の歴史的町並みでは、平入りの店蔵を別にして、主屋は通りに対して一統きのタテ屋で形成される。したがって、細長い家屋の中央部の部屋には、側面から通風・採光を図るしか方法がない。歴史的な敷地建築類型が全て建物を北西側に寄せ、

に由来する以上の敷地建築類型、またその現れである通りから見える樹木という特徴は、町割りが変わらない限り、大石田中心部の町並みにとって普遍的な解であり続ける。したがって、今後の町づくりに於いても尊重されるべきルールだと考える。一方ではロウズのように、豪雪故の必要性は変わらないが、生業の変化によって姿を消したものもある。その場合には文化財として現存するものの保存は検討すべきだが、無くなったものの復元までは必要ないとする。ファサードについても同様で、元々の町家の特徴を消している増築部分は除去し、改変された所の修復は検討すべきだが、建て替えて失われたものまで復元する必要はないと考える。ただし、現在の店舗の意匠、素材は、町家とあまりにもかけ離れて不調和であり、対策が必要である。その点で参考になるのは県内の金山町で、同町では真壁風白壁づくり腰下見板張りの住宅を奨励している。これは町家より後の昭和30年代頃までの住宅がモデルと思われるが、現在でも採用しやすいつくりであり、大石田でも参考になる。

以上は、町家が比較的多く現存する調査エリア中央部での実測調査から得た結論であるが、原理的には短冊形の敷地からなる調査エリア全域で成り立つと考えられる。しかしながら、以下の2点で課題を残す。まず、敷地間口が狭く、側面に空地を取れないC31型の住環境の扱いであり、実測調査では一例（図2⑤）だけであったが、まず調査エリア全体での棟数から調べる必要がある。また、北西部の四日町で今回調査した⑧の住宅は、総2階建てに建て替えているが、奥行き方向に3部屋が並ぶだけであり、これだと中の部屋を続き間とすれば、通り側と川側から通風・採光できるため側面の空地は必要性が少ない。この場合は間口が狭くても住環境を確保できると考えられるが、奥行き方向への増築は控える必要があり、1つの類型として検討する必要がある。以上は、今後調査エリアの両側の地区で、建て替えられた住宅の調査も補足して行う必要性のあることを示唆している。

注と参考文献

- 1) 本町街づくり委員会（1993）：大石田町本町商店街活性化計画策定事業報告書－最上川舟運発祥の商店街づくり－：大石田町商工会、大石田町本町商店街振興会
- 2) 日本建築学会街並み景観調査研究委員会（1997）：我が国における街並み景観の在り方調査研究報告書－歴史と文

- 化のまちづくりに向けて－：（社）日本建築学会
- 3) 温井亨（1998）：大石田町街並保存検討報告書：大石田町
- 4) 高橋恒夫（1995）：最上川水運の大石田河岸の集落と職人：大石田町
- 5) 長井政太郎（1973）：大石田町誌（復刻版）：中央書院
- 6) 大石田町（1985）：大石田町史（通史

- 編上巻）：大石田町
- 7) 大石田町（1993）：大石田町史（通史編下巻）：大石田町
- 8) 京都方言「ろーじ」の転訛と思われる。
- 9) 大石田町（1986）：写真でみる大石田のあゆみ（通史編別巻）：大石田町
- 10) 商店の意味で店、大石田で使う部屋名としてはミセと書き分け区別する。

Summary : The aim of this study is to seek how to conserve the historical district where traditional houses have already rebuilt considerably, investigating the typology of the traditional town houses at the core district of Ohishida Town in Yamagata Prefecture. The results are as follows: 1) Generally in historical site-building types of Oishida, there is the device to maintain a dwelling environment. They have built their houses around northwest side of the site and as a result on the other side they have a court for ventilation and daylighting. This system is useful for the town planning of this district also nowadays. 2) For the conservation of the streetscape, it is useful to restore the court which has faced the street, besides the restoration of the façade of traditional town houses.